



異世界でカフェを
開店しました。10

甘沢林檎

Ringo Amasawa



RB

レジーナ文庫



登場人物
紹介

ジーク

カフェの副店長でリサの夫。
冷静沈着な元騎士団員で、
お菓子作りが得意。

好きな食べ物：プリン

アラン

カフェ二号店の店長。
新しい料理を
考えるのが得意。

好きな食べ物：
パンケーキ

ヘレナ

カフェ二号店の副店長。
実家はパン屋を営んでいる。

好きな食べ物：
アイスクリーム

テレゼ

カフェ二号店の接客担当。
元は貴族の屋敷で
メイドをしていた。

好きな食べ物：ドリア

マーヴィン

カフェ二号店の調理担当。
美しい容姿に
似合わぬ熱血漢。

好きな食べ物：魚の煮付け

リサ(黒川理沙)

カフェ・おむすびの店長。
元は料理好きなOLで、異世界に
地球の食文化を広めている。

好きな食べ物：和食

バジル

リサと契約している
食いしん坊の精霊。

好きな食べ物：卵焼き

メルディアラ

エドガーの婚約者。
結婚の前に何やら
悩んでいるらしく――？

好きな食べ物：クッキー

エドガー

フェリフォミア国の
王子。
時々お忍びで
カフェを訪れる。

好きな食べ物：
ハンバーグ

目次

異世界でカフェを開店しました。

10

7

ある少女の選択

223

あるデザイナーの繁忙はんぼう

285

書き下ろし番外編

元メイドの敬意

309

異世界でカフェを開店しました。
10

プロローグ

金髪の青年が大きな執務机に向かっていた。仕事の書類に目を向けてはいるものの、どこか気がそぞろである。

時折ちらちらドアの方を見ており、何かを待っているようだ。

落ち着きがなく、仕事にも集中できない様子に、部屋の隅にいる側近の男性がこっそりため息を吐く。

そんな時、部屋の外から足音が聞こえてきて、青年は思わず腰を浮かせた。

ノックの音に側近の男性が答えると、ドアが開き、一人の騎士が入室してくる。

「そろそろ到着されるようです」

「そうか！」

青年は椅子から立ち上がり、いそいそとドアに向かって歩き出す。

側近の男性も、苦笑しながらそれについていった。

騎士に先導されて向かったのは、王宮の正門近くにある応接室。その部屋には何人かの使用人がいて、これから到着する人物を迎える準備を整えていた。

使用人たちは部屋にやってきた青年をソファに誘導する。

そわそわとしている彼を落ち着かせるためか、テーブルには湯気の立つティーカップが置かれた。

「殿下、久しぶりにお会いになるのですから、しつかりなさいませ。それに、これから先はずっと一緒にいられるのですから」

側近の男性が諫めるように彼に言葉をかける。それにハツとした彼は、こくりと頷いてお茶のカップに手を伸ばした。

茶葉の香りが鼻腔をくすぐる。一口飲むと果物にも似た爽やかな風味が口いっぱいに広がった。

体が温まるとともに、安らかな気持ちに包まれる。

先程までの落ち着きのなさが嘘のように、彼は穏やかな表情を浮かべた。

そして――

「エンゲルド国より、メルディアアルア姫がご到着されました」

応接室にやってきた騎士がそう告げると、それから間もなく、数人分の足音が聞こえ

てくる。

開け放たれた入り口にその姿が見えた瞬間、青年は思わず声を上げた。

「メルディアルア！」

「エドガー様！」

集団の中心にいた女性がぱっと顔を明るくする。

お互いに駆け寄った二人は自然と両手を握り合っていた。

「待っていたよ、メル」

「私も早くお会いしたかったです」

両手をぎゅっと握りしめて、おでこがぶつかりそうな近さで微笑み合う。

「これからはずっと一緒だ」

「はい」

片手をそっと外したエドガーは、嬉しさに紅潮したメルディアルアの頬を撫でる。

メルディアルアはその手に自らの手を重ね、頬ずりするように顔を寄せた。

第一章 手紙が届きました。

夏の暑さが落ち着き、朝晩は涼しい日が続くようになってきた。

季節は秋。学生たちは長い休みを終え、新たな一年に希望と不安を抱いている時期である。

人々が季節の移り変わりを感じる中、フェリフォミア王国の王都にあるカフェ・おむすびは今日も変わらず営業していた。

「お待たせいたしました。こちらでよろしいですか？」

入り口のすぐ隣にあるテイクアウト専用の小窓から、黒髪の女性店員が箱に詰めたケーキをお客さんに見せていた。彼女はリサ・クロカワ・クロード。この店の店長である。

元の名を黒川理沙くろがわりさと違って、地球からこの世界にやってきた異世界人でもあった。

小窓の外にいるのは、五歳ぐらいの女の子とその母親だ。

「はい、大丈夫です」

母親が箱の中を見て頷いた。その横で、女の子がケーキの並ぶショーケースに手をつ

いて、精いっぱい背伸びしている。

その様子に気付いたリサは、少し困ったように笑う。

「ヨーケースの上にある小窓はそれなりに高さがあるため、どうがんばっても女の子が見るのは難しい。」

すると、母親が女の子の頭にボンと手を乗せた。

「あなたが選んだケーキがちゃんと入っているから安心しなさい」

「……本当？」

「本当よ。家に帰ったらお父さんに見せないとね」

「うん！」

女の子の力強い返事にリサはほっとする。

丁寧かつテキパキとした動作で箱を閉じて、紙袋に入れると、リサはそれを母親に渡した。

「気をつけてお持ち帰りください。ありがとうございます」

母親は紙袋を片手に持ち、もう片方の手を女の子と繋いで帰っていく。女の子が母親を見上げながら「ケーキたのしみだねー」と言う声が聞こえてきて、リサの顔が自然と綻んだ。

そんな母娘を見送ると、リサは小窓を閉める。

「リサさん、フルーツタルトを一つ、お願いできるかしら？」

その声に振り返ると、ミルクティー色の髪の女性店員が、お皿を手に立っていた。

彼女はオリヴィア・シャーレイン。長い髪をサイドテールにしており、垂れ目がちの目元には泣きぼくろがある。グラマラスな体型の色気溢れる女性だ。

一児の母である彼女はおっとりした雰囲気だが、とても芯がしっかりしている。カフェ・おむすびでも接客を仕切ってくれていた。

「了解！ お皿貸してもらえます？」

「はい」

オリヴィアからお皿を受け取ると、リサはガラスのヨーケースからフルーツタルトを一ピース取り出す。ホール状に並べてあったタルトはほとんど売れ、残り二ピース。

閉店までの時間と客足を見て、補充するかどうか考えなければならぬ。

リサはカウンターの内側にある台にお皿を置くと、近くに置いてあった粉糖の容器を手に取り、逆さにしてフルーツタルトの上に振りかけた。

粉雪のような粉糖がフルーツタルトに降り注ぐ。全体が白くなったなら、今度はカウンター下の冷蔵庫から別の容器を取り出した。

先端をお皿の空いているところに当てて容器を握ると、中から赤いソースが出てくる。それはメイチといういちごに似た果物のソースだった。

リサはメイチのソースで、お皿に模様を描いていく。

白のお皿のキャンバスに、お花模様とランダムな大きさのドット模様が現れた。

「あら、可愛い」

フルーツタルトのお皿をのぞき込んだオリヴィアが、微笑ましそうに目を細めた。彼女はタルトと一緒にオーダーされたお茶を準備してくれていた。

「運んでもらえる？」

「かしこまりました」

フルーツタルトのお皿をオリヴィアに託すと、リサはホールが落ち着いていることを確認して、厨房へ足を向ける。すると、厨房から人が出てきた。

焦げ茶色のボブをハーフアップにした彼女はデリア・オーウェン。オリヴィアと同じく、一兎のママさんだ。

彼女の持つトレイにはガラスの器に盛られたデザートが載っていた。パステルオレンジの丸いデザートは、メロンに似たリューミという果物のシャーベット。秋に入ったとはいえ、暖かい日も多く、こういった冷菓類はまだ人気だ。

リサは、すれ違いざまデリアに声をかけた。

「私は厨房に戻るけど、何かあったら呼んでね」

「はい」

微笑んで頷いたデリアを見て、リサは厨房へと入る。その途端、スパイシーな香りがリサの鼻に届いた。

香りの元であるコンロのそばには、大柄な男性がいて、大きな鍋をかき混ぜている。彼はヘクター・アディントン。カフェ・おむすびの料理担当だ。フェリフォミア王宮の見習い料理人だが、二年間という期間限定でカフェで修業をしている。

リサは彼に近づき、鍋の中をのぞき込む。こぼこぼと煮立った鍋の中身はカレーで、みじん切りの野菜と挽肉がルーとともに煮込まれていた。

「カレー、おいしそうにできてるね」

「うわあ！」

リサの声に、ヘクターはビクツと肩を揺らした。カレーが焦げ付かないよう混ぜるのに集中していて、リサの気配には全く気付かなかったようだ。

「びっくりした、リサさん脅かさなてくださいいよ」

「ごめんごめん」

すでにランチタイムを過ぎている。今仕込んでいるこのカレーは、明日のランチメニューになる予定だ。

少し前からカフェのメニューに登場するようになったカレー。はじめは独特な見た目と濃厚なスパイスの香りに、お客さんから『これ、本当においしいの?』と聞かれることもあった。カフェのメンバーでさえ、初めてカレーを見た時は同じような反応だったのだ。

けれど、去年の夏くらいからピラフや揚げ物などに少しずつカレー風味を取り入れると、常連のお客さんから徐々にカレー味の良さが広まっていった。そして、満を持してカレーをメニューに取り入れてみたのである。

すると、一度食べたらやみつきになる味が評判となり、定期的にメニューに入れてほしいという要望が殺到した。そのほとんどは、去年の秋にリサが料理指導をした騎士団の面々からで、あの時食べたスープカレーの味が忘れられないという。その結果、カレーは週一というかなりの頻度でランチメニューになっているのだ。

明日も多くの騎士団員が店に来るんだろうな、とリサは微笑む。

「リサさん、味見してもらってもいいですか?」

「うん」

ヘクターはコンロを弱火にすると、小皿にカレーを少量取り、リサに差し出した。

神経を舌に集中させ、じっくりと味わってから、リサは顔を上げる。

「うん! いいね! 作りたてだからまだ味がなじんでないけど、明日になればいい感じになると思う」

リサの言葉に、ヘクターはばあつと表情を明るくさせ、小さくガツポーズした。

「やった! 今日自信あったんですよ!」

リサから一度でオーケーをもらえたことが嬉しいらしい。無邪気にはしゃぐヘクターを、リサは微笑ましく思った。

その時、厨房の裏手にある扉が開く。

そこからひよっこり顔を出したのは、シルバープロンドに青い目の男性だった。

「ジーク、お帰りなさい」

「ただいま」

リサにジークと呼ばれた彼は、ジーク・ブラウン・クロード。リサの夫で、カフェ。おむすびの副店長だ。

彼はフェリフォミア国立総合魔術学院——通称・学院の料理科で、リサとともに講師をしている。

今日も授業があり、それを終えてカフェにやってきたジークは、ラフな私服姿だった。
「着替えてくる」

「うん、そのあと明日の仕込み手伝ってくれる？」

「了解」

ジークは短く返事をする、二階に上がっていった。

学院は長い夏休みが終わり、十日ほど前から新学期が始まっている。日本出身のリサにとつて、新学期といえば桜の季節というイメージだが、こちらの世界では秋から始まるのだ。

リサが来てから設立された料理科も、この秋で三年目を迎え、一期生が最終学年に上がった。毎年新入生が増え、校舎も増築して少し広くなっていた。

夏休み中、リサとジークは新婚旅行を楽しんだが、今はカフェと料理科を交代で行ったり来たりしている。なかなか大変ではあるが、去年採用した講師たちがそれぞれ授業を受け持つようになり、今年も新たな講師が増えた。そのため、リサとジークの生活にも前より余裕が出たのだった。

リサがこの世界にもたらした料理は、それを作る料理人も、教える講師も、徐々に増えてつづつある。

カフェ・おむすびを開いたのは、地球の食文化を広めたかったからだ。それが少しずつ形になっているのを感じながら、リサは今日も料理に打ち込むのだった。

本日の営業もつづがなく終わり、閉店作業に入る。

そんな中、オリヴィアがそういえばと口を開いた。

「今日お客さんが言っていたんだけど、数日前にエンゲルドのメルディアルア姫がフェリフォミアにいらしたらしいわよ。ご結婚はまだ先だと思うけど、王族の結婚式となると準備がいろいろあるのかしら？」

「なんといつても王太子様と結婚するんだから、豪華な結婚式になるでしょうね」

デリアがうつとりとした顔で答える。

「じゃあ、メルディアルア姫はこれからずっとフェリフォミアにいらっしやるってこと？」

リサが疑問に思ったことを口にする、オリヴィアとデリアが答える。

「そうなんじゃないかしら？」

「エンゲルドは島国だから行き来するのが大変でしょうしねえ」

二人の言葉に、リサはなるほどと納得する。

片付けと明日の仕込みを終えると、ジークとともに店を出た。日もずいぶん短くなり、すっかり夜の帳とまりが降りていた。

王都の中央にある駅まで歩き、そこから駅馬車に乗り込む。馬車といっても魔術具なので、実際に馬が引いているわけではない。

ジークと並んで座り、揺られること数分。馬車が家の近くの駅に到着した。そこからクロード家の屋敷まではずぐだ。

門をくぐり、十メートル以上ある小路を通って別館にたどり着く。リサとジークは結婚して以来、本館ではなくこの別館で生活していた。

ジークが開けてくれたドアから中に入ると、玄関ホールで一人のメイドがリサたちを待っていた。

「お帰りなさいませ、リサ様、ジーク様」

「ただいまメリル」

「ただいま」

メリルと呼ばれたメイドはクリーム色の髪を複雑に編み込み、白いレースのシニヨンキャップを被っている。濃紺色のお仕着せは、五分丈のアンブレラスリーブに、ハイウエストなロングスカートが特徴だ。

色や型が毎日変わるお仕着せは、すべてシリルメリーというブランドのもの。リサの養母アナスタシアがそのオーナー兼デザイナーであるため、クロード家の使用人はみんなおしゃれだった。

リサとジークがリビングルームに進むと、もう一人の使用人であるヴァレットのクライヴがいた。ヴァレットとは主人の身のお世話をする従者のことだ。

「お帰りなさいませ」

「ただいま、クライヴ」

「ただいま」

リサとジークはクライヴに挨拶あいさつを返すと、リビングのソファに座った。帰宅したら、まず二人からいろいろと報告を聞いたり、翌日以降の予定を確認したりするのが日課だ。今日は特に報告されることも、確認するべきこともなかったのだが、メリルがあるものをリサに差し出した。

「リサ様宛てにお手紙が届いております。どうも王宮からのようで……」

「王宮から？」

リサは怪訝けげんに思いながら手紙を手を取った。差出人を見てみると、なんとエンゲルドのメルデアリアルア姫だった。

今日オリヴィアが言っていた話は本当だったようで、フェリフォミア王宮の紋章のスタンブが押されていた。

封蝋部分から開けて、中を見る。

そこに書かれていたのは、姫がエンゲルドからフェリフォミアに移ってきたことと、結婚式まで王宮の離宮に滞在すること。

そして――

「近いうちに二人でお茶会をしませんか、つて……」

リサが問うような視線を向けると、ジークがそれに頷いた。

「せっかくだから行ってきたらどうだ?」

「そうだね。またお会いしたかったし」

島国育ちで、はちみつを垂らしたような黄みがかった肌をしたエンゲルドの姫。日本人の自分と共通点がある彼女に、リサは親しみを感じていた。

手紙にはリサの都合のいい日時に合わせてと書いてある。幸い、次のカフェの休業日であれば都合が付きそうだ。

「メリル、お返事を出したいんだけど、明日お願いできる?」

「かしこまりました」

メリルは楚々とした態度で頷く。

念のため、明日の朝食の時にアナスタシアたちにも話しておこうとリサは思った。

第二章 王宮におでかけです。

王都の街を車窓から眺めながら、リサは馬車に揺られていた。向かいの席にはメイドのメリルが座っている。

そして、もう一人――

「ふんふん♪」

鼻歌を歌いながら窓の外を見ているのは、緑の服を着た体長二十センチほどの精霊。リサと契約しているバジルドだ。

普段はリサの仕事場についてきたり、自由に王都を散策したりしている。今日は王宮という珍しい場所へのおでかけということで興味があつたらしく、ついてきていた。

王宮へは何度か足を運んでいるものの、リサが用事があるのはだいたい厨房。主に使用人が働いている建物にあり、しかも裏口から入るため、正装する必要はない。

けれど、今日は違う。メルディアルアからの招待状はカフェ・おむすびの店長リサではなく、クロード侯爵家令嬢リサ・クロード宛てにきたものだ。

正装まではいかなくともそれなりの服装で、なおかつ馬車に乗って正門から入る必要があった。

正門前で一度馬車が止められ、門を守る騎士が御者に声をかける。その後、馬車のドアがノックされたので、メリルがドアを開けた。

騎士はリサに視線を向けて、口を開いた。

「クロード侯爵令嬢、リサ・クロード様でお間違いないでしょうか？」

「はい、そうです」

リサが登城することは事前に伝わっているはずだし、御者も入城許可証を持っているが、警備上こうした確認が必要らしい。

なんの問題もなくドアが閉められ、馬車は門をくぐった。

フェリフォミア王宮と一口に言っても、いくつかの区画に分けられている。ここは王族の居住している場所であり、政治の中核でもあるのだ。区画によってセキュリティレベルも異なっており、基本的に敷地の奥に向かえば向かうほど、警備は厳重になっていく。

正門のところでされたのと同じようなチェックを数回受けた後、リサの乗った馬車はようやく目的地である離宮に到着した。

「リサ様、ようこそお越しくださいました」

「メルディアルア様、本日はお招きくださりありがとうございます」

メルディアルアはわざわざ離宮の玄関ホールでリサを出迎えてくれた。ピンクゴールドの髪をハーフアップにして、柔らかいパステルイエローに差し色としてチョコレート色が入ったドレスを身に纏っている。ふんわりとして可愛らしい雰囲気は、以前会った時と変わりなかった。

「ほんの少しですが、お土産を持ってきたんです」

リサの言葉を聞いて、メリルが手土産の入ったバスケットをメルディアルアの使用人に渡す。今日リサが持ってきたのは、ドライフルーツやナッツなどの入った、いろんなフレーバーのマフィンだ。

「まあ、ありがとうございます」

ほんのりと漂う甘い香りに、メルディアルアは目を輝かせた。

挨拶もそこそこに、メルディアルアの案内でサロンへと移動する。離宮はリサの住むクロード家の屋敷と同じくらいの広さで、王宮の建物の中ではこぢんまりとしていた。

ピンクやクリーム色など柔らかい暖色を使った家具やファブリックは、可愛らしいメルディアルアにとてもよく似合っている。

お茶会が行われるサロンルームは、玄関ホールの近くにあった。部屋に入ると、正面にある大きな窓から庭が見える。

「こちらへどうぞ」

メルディアルアに案内されたのは窓際にあるテーブルセットだった。メリルに引いてもらった椅子にリサが座ると、その正面にメルディアルアも着席した。

そうして二人だけのお茶会が始まる。

主な話題はメルディアルアとエドガーの結婚準備のことだった。

「結婚衣装を依頼されて、養母が張り切っていましたよ」

「まあ、嬉しいですね。製作時間が短くて心苦しいのですが、リサ様やアデリシア王妃のドレスが素敵で羨ましかったですので、楽しみなのです」

リサの結婚衣装もアナスタシア渾身の作でとても豪華だったが、メルディアルアはなんととっても次期王妃。シリルメリーでは全社をあげて製作しているらしい。どんな衣装になるかリサも楽しみにしている。

「メルディアルア様も、いろいろと準備でお忙しいんじゃないですか？」

「そうですね。でもフェリフォミアの方々がとてもよくしてくださいますから、それほど大変ではありません。ただ……」

そう言って、メルディアルアが顔を曇らせる。少し逡巡してから、彼女は意を決したように口を開いた。

「実は今日リサ様をお招きしたのは、ご相談があったからなのです」

「相談、ですか？」

リサが聞き返すと、メルディアルアは神妙な顔でこくりと頷いた。

「お恥ずかしいことなのですが……」

そう前置きして彼女は話し始めた。

事の発端は、メルディアルアがフェリフォミアに来てすぐのこと。結婚式の準備として真っ先に取りかかったのが、招待客リストの作成だった。

王太子の結婚式、さらにお相手は隣国の姫ということもあり、各国から賓客が招かれる。

どの国から、誰を呼ぶのか。それによって準備の仕方も大いに変わってくるのだ。国の要職を担う人々は多忙なため、かなり前段階からスケジュールを押さえておく必要もあった。

当然のことながら、メルディアルアも招待したい人を聞かれた。だが両親であるエンゲルド国王と王妃はもちろん、国の重鎮たちはすでにリストに入っている。

新たに問われたのは、もつとプライベートルな付き合いの人たちだ。

『エンゲルドとフェリフォミアだけでなく、他の国のご友人でも構いません。招待したい方々のお名前をお聞かせください』

結婚式の準備に携わる文官にそう言われて、メルディアルアはリストを作り始めた。

母国であるエンゲルドから招待する友人はすぐ決まった。国を出てくる前に開いたお茶会の際にも、結婚式には招待するからねと話していたのだ。

その時のことを思い浮かべて微笑みながら、次は——とフェリフォミアからの招待客を考えた。

真つ先に浮かんだのは、リサだった。フェリフォミアの新しい料理に興味があったメルディアルアのために、開店前のカフェ二号店でもてなしてくれた。

何より、フェリフォミア国王に結婚の許しをもらう際も協力してくれたのだ。

だが、リサはエドガーとも親交があるし、リサの養父母はフェリフォミア国王夫妻と親交がある。だから、メルディアルアから招待する必要はないかもしれない。そんなことを思いながら、次の人物の名前を書こうとして、メルディアルアは手を止めた。

リサ以外の人物の名前が出てこないのだ。

「今更ながらフェリフォミアにはリサ様以外、親しい方がいないというのに気が付きまして……」

メルディアルアは恥じ入ったように俯いた。

「でも、それはフェリフォミア国王に反対されていた手前、エドガー殿下との関係を公にできなかつたからですよね？」

リサがすかさずフォローする。

エドガーとの交際が公になっていて、もつと早く婚約できていたのであれば、フェリフォミアで友人を作るチャンスもあっただろう。

リサの言葉に、メルディアルアは顔を上げる。

「ですが、このままではいけないと思うのです。今後のことを考えたら、フェリフォミアの方々と親しくしておかなければならないでしょう。エドガー様がいずれ国王になられた時に、私もお力になりたいのです」

現国王は健在だから、エドガーが即位するのはまだ先だろう。だが、すでにエドガーは国政に関わっているので、メルディアルアはその手伝いをしたいらしい。

そのために、自分の足場を固めたい気持ちも、リサには理解できた。

とはいえ、リサが力になれるかどうかはわからない。
メルディアルアの言う『フェリフォミアの方々』というのは、貴族のご令嬢たちという意味だ。

リサ自身、クロード侯爵家の養女であり、純粋な貴族令嬢ではない。それに、リサが友人と呼べる令嬢はそう多くなかった。

「あの、メルディアルア様のお力になれるほど、私も交友関係が広くはないのですが……」
リサはおずおずと打ち明ける。クロード侯爵家の令嬢でありながら、あまり社交をしなくて済んでいたのは、そういった方面に関わらなくてもいいように、養父であるギルフォードとアナスタシアが配慮してくれていたのかもしれない。

「そうなのですか……」

メルディアルアはリサの言葉にしゅんとする。その悲しそうな顔を見て、リサは「うっ」と胸を押さえた。

可憐なメルディアルアが悲しそうにしている姿は、とても心にくるものがあつた。同性だけれど、庇護欲ひごごを駆り立てられるのだ。

せつかく頼つてもらつたからには力になりたい、と思わせる何かが、メルディアルアにはある。

リサは、ぐっと手を握りしめて口を開く。

「でも、お茶会くらいなら開けると思えますよ！」

「まあ、本当ですか!？」

「従弟いとこの婚約者が王都にいますし、カフェの常連のご令嬢や、シリルメリーの顧客こきゃくのご令嬢もお誘いできると思えます」

お店をやつていて良かったとリサは思う。

メルディアルアは悲しそうな顔から一転、目をキラキラと輝かせた。

「さすがリサ様ですね！ やっぱりリサ様に相談して良かったです」

「とはいえ、私も大人数のお茶会を開くのには慣れてませんし、シリルメリーの顧客こきゃくに關しては、養母に聞かなければなりませんから、一度話を持ち帰つてもいいですか？」

「はい、もちろんです！ 私もいろいろと準備を進めておきますね」

そうして、リサはメルディアルアの離宮を辞じした。

クロード家に戻ったりリサは、さっそくアナスタシアに相談した。

「まあ、メルディアルア姫とお茶会なんて楽しそうね！」

アナスタシアはリサの話を聞くなり、うきうきとした様子を見せる。お茶会を主催す

るのも参加するのも好きなアナスタシアらしい言葉に、リサは少し苦笑した。

リサはどちらかというと、お茶会が苦手だ。アナスタシアに誘われて何度か参加したことはあるが、どうもあの独特な空間に馴染めなかった。

しかし、今回ばかりはそうも言っていられない。

「それで、シシルメリーの常連のお嬢さんたちを招待したいと思ってるんですけど……」

「ええ、いいわよ。後で名前を教えるわね」

「ありがとうございます！ あと、もう一つシアさんに聞きたかったんですが、お茶会を成功させる秘訣はありますか？」

今回のお茶会はリサとメルディアアラの連名で主催することになっている。お茶会の場所はメルディアアラの離宮だけれど、リサも主催者の一人として積極的に盛り上げなければならぬ。

アナスタシアはリサの言葉にきよとんとした後、ばあっと目を輝かせた。

「リサちゃんがそんなにお茶会に意欲的だなんて……！ 任せて！ 成功の秘訣をしっかり伝授するわ!!」

リサが珍しくやる気を見せているのが嬉しかったらしい。アナスタシアは意気込みを表すように両手をグッと握った。

「えっと、シアさん……？ ほ、ほどほどにお願いします……」

リサとしては、ちょっとしたコツを教えてもらえれば……くらいの気持ちで聞いたつもりだった。しかし、アナスタシアはそれに全力で応えようとしている。

こちらからアドバイスを求めた手前、やっぱりいいですとも言えず、リサは引きつった笑みを浮かべるしかなかった。

「成功のポイントは、大きく分けて招待客、開催場所、話題の三つよ」

「ふむふむ」

「まずはじめに招待客ね。どういった会なのかを明確にしなければ、誰を招待するのか決められないわ」

「えーっと、今回はメルディアアラ姫の交友関係を広げるためのお茶会で……」

「大まかに言えばそうね。ただ、交友関係を広げるといってもメルディアアラ姫の場合、フェリフォミアでの地盤作りという意味合いが強いんじゃないかしら？」

「そうですね」

「メルディアアラ姫はエドガー殿下の力になりたいとおっしゃっていたのよね？ それなら若手の女性派閥の中心になるのが一番よ。王宮の要職についている方の奥様や、地

方領主の奥様方と仲良くなれば、何かとやりやすくなると思うの」

「確かに……」

「それで言えば、リサちゃんの従弟であるサミュエルくんの婚約者は最適だわ。あとは、うちの常連に王宮の重役の娘さんたちがいるから、その子たちもね」

「じゃあ、カフェの常連で、王都に滞在中の領主の娘さんがいるんですけど、誘ってもいいですかね？」

「いいと思うわ！」

リサはアナスタシアのアドバイスを元に、招待する人たちをメモする。

「招待客同士の仲の良さも重要ね。若いうちは特に親同士が仲が悪かったり敵対していたりすると、なかなかうまくいかないのよ。そこは事前に調べておく必要があるわ」

「仲が悪い人たちを招待したら、気まづくなっちゃいますもんね」

「そういったことを含めて、招待客の情報はあらかじめ調べておくべきなの。他のお家との繋がりがや、親の職業、婚約者の有無とかね。趣味や嗜好についても調べておけば、話題を振りやすいわよ」

「なかなか難しいんですね……」

アナスタシアは簡単に言うけれど、つまり出席者全員のプロフィールを事前に頭に叩

き込んでおく必要があるということだ。

ただ楽しくお茶を飲んで終わりではないのだと、改めて実感する。

アナスタシアの助言をメモしながら、リサは「うーん」と唸る。

「ふふふ、このあたりは慣れもあるわよ。いろんなお茶会に出ればその分、多くの人と会うし、徐々に覚えていけるわ」

「今更ですけど、もっとシアさんのお茶会に参加しておけば良かった……」

「まだ遅くはないわよ！ まあ、それは追々ね」

アナスタシアはにっこりと笑みを浮かべ、話を続ける。

「次は開催場所ね。今回はどこでする予定なの？」

「メルディアルア姫の離宮です」

「うーん……それはやめておいた方がいいわ」

「え？ どうしてですか？」

「私は離宮に行ったことはないのだけれど、とても私的な場所でしょう？ メルディアルア姫を結婚までお守りするのための場所だから、警備も厳重だし」

「そうですね……」

リサは今日離宮を訪ねた時、至る所で騎士にチェックされたことを思い出す。

「もちろん招待客は事前に身元を確かめておくことになるけれど、メルディアルア姫とは初対面の方々ばかりでしょう。万が一のことを考えて、王宮のサロンを使った方がいいわ。その方が警備もしやすいし、メルディアルア姫の私的なお茶会じゃなくて、公式なものと同囲にもアピールできるわ」

「離宮の方が、特別感が出ると思ってたんですけど……」

リサが少ししよんぼりした声で呟くと、アナスタシアが苦笑した。

「二回目はそうしたらいいわ。こういうのは段階を踏むことも大切よ」

「なるほど」

「できれば王族専用のサロンを使うのがいいわね。基本的にアデルしか使わないから、彼女のお茶会が入っていなければ使えると思うけれど」

アナスタシアがアデルと呼ぶのは、フェリフォミアの王妃アデリシアのことだ。メルディアルアにとつてははずれ姑になる。

「メルディアルア姫に聞いてみます」

「最後は、話題についてね。ここが一番重要な部分よ」

アナスタシアは真剣味を帯びた目をリサに向けてくる。リサはメモを取るためのペンをぎゅっと握り、アナスタシアの言葉に耳を傾ける。

「お茶会というのは駆け引きの場でもあるの。特に今回メルディアルア姫にはフェリフォミアで交友を広げたいという目的があるのでしよう？ だったら、彼女と仲良くすれば何か利があると思わせなければいけないわ」

「メルディアルア姫と付き合う利、ですか……」

「そう。こう言ったら冷たく聞こえるかもしれないけれど、貴族社会の交友関係には損得が関わってくるの。積極的に利益を得ようとすることは、長い目で見れば国に貢献することにも繋がる。そういう考えの人でなければ、そもそもメルディアルア姫の友人にふさわしくないとと言えるわね。だから、今回メルディアルア姫に紹介する令嬢は、ある程度の家柄で、ご家族もそれなりの地位にいる方が良いわ。メルディアルア姫がフェリフォミアでの地盤を固めるとい意味でも人選は重要なもの」

アナスタシアの説明を聞いてリサはぐるぐると考える。メルディアルアから直接頼まればしたもの、アナスタシアの話を聞く限り、そもそもリサ自身、メルディアルアの友人にふさわしくないのではないかと思えてきた。

「えっと、それって私が参加しても大丈夫なんでしょうか……?」

リサが眉間に皺を寄せて言うと、アナスタシアはきよんとした表情を浮かべた。

「あら、リサちゃんは大丈夫よ！ 養女ではあるけれど、クロード侯爵家の一員だもの。

それに、リサちゃん自身にも料理という大きな強みがあつて、それがリサちゃんと付き合う利になるわ」

「料理が、ですか？」

意外なことを言われて、リサは目を瞬かせた。

「もちろん！ おいしいものを食べたいというのは自然なことでしょう？ カフェ・おむすびはフェリフォミアでは知らない人はいないほどの有名店だし、アシユリー商会からレシビも販売されてるわ。私のお茶会でもカフェのようなお菓子を期待されるくらいだもの。リサちゃんのお茶会に招待されたら、もれなくおいしいお菓子が食べられると誰もが思うはずよ」

「お菓子は準備するつもりでしたけど、そこまでは考えていませんでした」

「ふふ、リサちゃんらしいわ。あとは、シリルメリーのことも強みになるわね。今どんな服が流行っているかとか、それにはどういふ小物が似合うかとか、リサちゃんも覚えておいた方がいいわ。私がメルディアルア姫の結婚衣装を手がけることは知られているし、当然話題に上ると思うから」

アナスタシアは自身の経営する服飾店・シリルメリーでデザイナーをしている。フェリフォミアの女の子なら一度は着てみたいと憧れるブランドで、そのデザイナーである

彼女は、いわばファッションリーダー的存在だ。

アナスタシアと仲良くする利は、最新の流行を知ることにあるのだろう。

アナスタシアは季節ごとに近しい人々を呼んで、次のシーズンの新作衣装をお披露目している。そこで参加者に感想を聞き、既製服やセミオーダーのラインナップを決めているらしい。

アナスタシアがお茶会を頻繁に開いているのも、そうした話題を通じて仕事に生かすためかもしれないとリサは思った。

「問題はリサちゃんよりも、メルディアルア姫の方ね」

「え？ なぜですか？ メルディアルア姫はエンゲルドでお茶会をよく開いていたそうだし、慣れていらつしゃると思うんですけど……」

「お茶会の作法や会話運びは問題ないと思うわ。けれど、メルディアルア姫と付き合つてどんな利があるか、というのが問題ね」

「はあ……」

「彼女が興入れすれば、エンゲルドとの国交は以前より盛んになるわ。そこで、メルディアルア姫、ひいてはエンゲルドとお付き合いすることで、何が得られるかをアピールできれば上々ね」

「な、なるほど……」

なかなか難しい。

リサがエンゲルドについて知っていることはそう多くない。フェリフォミアの南東にある島国で、温暖な気候。海産物が有名で、日本人に似た肌色の人種が住んでいる。

そのくらいしか知らないのだ。お茶会を連名で主催するには知識が乏しすぎる。別に戦うわけではないが、まず味方のことを知らねばならない。

「手っ取り早いのは、メルディアルア姫がお茶会を通じて、エンゲルドのものを流行させることかしらね？」

アナスタシアがぼつりと呟く。その言葉を聞いて、まずはメルディアルアとしつかり打ち合わせしようとりサは思った。

第三章 お茶会の準備は大変です。

翌日からアナスタシアのアドバイスを元に、お茶会に備えることにした。招待客候補についての情報収集はクロード家の執事たちに任せて、リサはリサなりの情報を集める。

朝一でやってきたのは、カフェ・おむすび二号店だ。リサの周りで流行に詳しい人物といえば、二号店の副店長を務めているヘレナだろう。

ちようどメニユーの打ち合わせで二号店に行く予定だったので、そのついでに話を聞くことにした。

打ち合わせが終わると、さっそく話を切り出してみる。

「最近の流行ですか？」

ヘレナはうーんと悩む。頬に人差し指を当て、少し首を傾げた。

「この秋はストールが流行ってますね。レース素材のやつ」

「そうなんだ」

そういえばアナスタシアが『秋の新作よ！』と言って作ってきた服の中にもストールがあった。だが、ヘレナに言われなければリサは気付かなかった。

「でも珍しいですね。リサさんがこういうことを聞いてくるなんて」

「あー、実はね。メルディアルア姫とお茶会を開くことになって——」

リサはメルディアルア姫とお茶会を開くことになった経緯と、アナスタシアからのアドバイスについてヘレナに話す。

「メルディアルア姫とお茶会！ 素敵ですね！」

目を輝かせて食いついてきたヘレナに、リサは苦笑する。こういう華やかな話題が好きなヘレナらしい反応だ。

「それがなかなか大変でねえ……お茶会の経験自体そんななのに、開く側になるとは思いもしなくて……」

「いろいろ気配りしないといけないから、確かに大変そうですね。……あ、そうだ！」
何か思いついたのか、ヘレナが両手をパチンと合わせる。

「テレーゼにも手伝ってもらったらどうですか？」

「テレーゼに？」

テレーゼはカフェ二号店のメンバーで、ヘレナと同じく接客を担当している。

「元は貴族のお家のメイドだったので、お茶会にも詳しいと思いますよ。ご令嬢付きだったはずですから」

「そういえばそうだったね」

ヘレナの紹介で採用した時、そのようなことを聞いた記憶がある。

その時、噂をすれば影というようにテレーゼが出勤してきた。

「ああ、ちょうど良かった、テレーゼ！」

ドアを開けて入ってきたテレーゼを、ヘレナが大声で呼ぶ。突然のことに驚いたのか、

テレーゼはびくりと肩を揺らした。

「お、おはようございます、リサさん、ヘレナ」

「おはよう、テレーゼ」

動揺しながらも礼儀正しく挨拶するテレーゼに、リサも挨拶を返す。

「ねえねえ、テレーゼ！ お茶会のお手伝いしない？」

わくわくと楽しそうに言うヘレナに、テレーゼは小さく首を傾げた。

「えっと、話が見えないのですが……」

もつともだとリサは苦笑する。そしてお茶会を開くことになった経緯と、元メイドのテレーゼなら力になってくれるのではと考えたことを説明した。

「なるほど、そういうことでしたか」

ようやく合点がいったようにテレーゼが頷いた。

「私で良ければ協力しますよ」

「本当!? 助かるよ」

テレーゼに協力してもらえたら心強いと思っていたので、快諾してもらえたことにほっと息を吐いた。

身近な人に手伝わってもらえると思うと、苦手意識のあるお茶会にも少し前向きになれる気がした。

リサはアナスタシアから助言をもらい、カフェのメンバーからも情報を仕入れながら、お茶会に向けての準備を進めていく。

そして二度目の打ち合わせのため、再びメルディアルアと会うことになった。

以前も通った道を馬車で進み、メルディアルアの離宮に到着する。彼女は前と同じく笑顔でリサを迎えてくれた。

サロンに通され、さっそく打ち合わせに入る。大まかな情報は手紙でやりとりしていたため、ある程度共有はできていた。今日はそれをさらに煮詰めて具体的な形にするこ

とが目的だ。

「ご招待する令嬢については、リサ様のご提案通りでよろしいかと思えます。……と言っても私が直接知っている方々ではないので、リサ様からお声がけしていただくしかないのですが……」

「それは気にしないでください。彼女たちと知り合うことが、今回のお茶会の目的でもあるんですから」

「そうですね。ありがとうございます」

メルディアルアはおつとりと微笑む。つられてリサも笑顔になった。

「王宮のサロンは使えそうですか？」

「エドガー様にお聞きしたら、大丈夫とのお返事をいただきました。アデリシア王妃も困ったことがあったら相談するようにおっしゃってくださいました」

話を聞く限り、メルディアルアとアデリシア王妃の関係が良好なようで安心した。

メルディアルアたちの結婚に反対していたフェリフォミア国王を説得したのは、アデリシア王妃だったのだ。そのこともあって、メルディアルアとアデリシア王妃の間には、今のところ嫁姑問題はなさそうだ。

次は、当日使う茶器や食器の準備について決める。アナスタシアが言うには、会場のセッティングも主催者のセンスを問われる重要な部分とのこと。招待される側はそういうところもチェックしているのだそうだ。

そちらの方面はメルディアルアの方が得意そうなので、リサは全面的に任せることにした。メルディアルアも異存はないらしく、快く請け負ってくれた。

だが問題は、お茶会の話題についてだ。連名で開くとはいえ、リサの役目はメルディアルアに令嬢たちを紹介すること。そこから先はメルディアルア自身で人間関係を築か

なければならぬ。

「メルディアルア様の方で、何か話題にできそうな事柄はありますか？ その……」
 『他の人にとって利益になるようなこと』とはさすがに言えず、リサは言葉を詰まらせる。その様子を見てメルディアルアは柔らかに微笑む。

「私と付き合う利点を示せるような話題、ですね？」

リサの言わんとしていることを察したらしく、メルディアルアがはっきりと言った。

「……はい」

「エンゲルドの文化を紹介するのがいいかと考えたのですが、どういうものが求められているのかいまわからなくて……リサ様にご相談できたらと思っていたのです」

「そうだったんですね。例えば、どういったものを考えていたのですか？」

「食べ物ですと、エンゲルドは島国なので海産物が有名ですね。あと、少し変わったフルーツもあります。ファッション関係ですと、織物と染め布ですね」

「いろいろとあるんですね」

「ええ。ちなみに、リサ様自身はどういった話題を考えているのですか？」

「えーっと、まずはお菓子のことですね。新作のお菓子を持参する予定なので、それを食べてもらえば会話が弾むかと思ひまして。あとは、ファッションのことですね。シリ

ルメリーの顧客のご令嬢もいらつしやいますから、興味があるのではないかと」

「それは良いですね。私もその流れで自国のファッションについて、お話しできればいいのですが……」

会話の流れを読まず、全く違うジャンルの話をするのは難しい。リサの話題にうまく絡められればとメルディアルアは考えているようだ。

「洋服といえ、今作っていただいている結婚衣装のことがありますが、できあがるまで人に詳しく話さないよう言われているのです。エンゲルドのファッションのことも、一歩間違えると押しつけがましい感じになってしまいそうで……」

メルディアルアは難しい顔で悩む。リサもアナスタシアからメルディアルアの結婚衣装を製作していることは聞いているが、確かに詳細は話してもらえなかった。

エドガーとメルディアルアの結婚式は国家規模のイベントなので、衣装も含めてあまり公おおびやくにはいけないようだ。

「なかなか難しいですね。ちなみにエンゲルドでのお茶会はどういったものなんですか？」

「エンゲルドのお茶会も基本的にフェリフォミアと変わりませんよ。お茶を飲んで、お話をします。ただ、お菓子ではなくフルーツを摘つまむことが多いですね」

その時メルディアルアの背後から「あつ」と声が聞こえた。リサとメルディアルアが声のした方を見ると、一人の侍女がハツとした様子で口を押さえている。

「ミーシャ、どうかしたの？」

メルディアルアは彼女に声をかける。ミーシャと呼ばれた侍女が、おずおずと口を開いた。

「お話し中に申し訳ございません。あの、マレナ茶をお出しするのはいかがでしょうか？」

「マレナ茶、ですか」

ミーシャの提案を受け、メルディアルアはうーんと唸る。

「あの、マレナ茶ってなんですか？」

リサにとっては初めて聞くお茶だった。こちらの世界で新しいお茶に出会えると思うと、すごく興味が湧く。

好奇心に瞳を輝かせるリサを見て、メルディアルアは一瞬目を丸くしたが、すぐに微笑んでミーシャに合図した。

「マレナ茶はエンゲルドではよく飲まれているお茶なのです。ただ、独特の苦みがあるので、苦手な方もいらつしやいますね。私も子供の頃は苦手だったのですよ。今は好きですけど」

メルディアルアが説明をしている間に、ミーシャともう一人の侍女がマレナ茶を準備する。

メルディアルアの前に、カフェオレポウルのような取っ手のない陶器や、注ぎ口から湯気の出ているポットなどが置かれていく。

道具を準備し終えると、ミーシャたちは後ろに下がった。メルディアルアが蓋付きの容器を手にとったところを見ると、どうやら手すから淹れてくれるらしい。

容器の中に入っているのは茶葉ではなく緑色の粉末だった。それをメルディアルアは小さなスプーンで掬い、カフェオレポウルのような陶器に入れ、ポットのお湯を注いだ。

メルディアルアが次に手に取ったのは、小さな箒のような道具だった。太い筒状の持ち手から針みたいに細い棒が放射状についている。

それを見て、リサは既視感を覚えた。似たものを元の世界で見たことがある。

メルディアルアはその木製の道具をポウルの中に入れ、シャカシャカと音を鳴らしてかき混ぜ始めた。

粉末だったものがお湯に溶け、泡立っていく。やがてきめ細かな泡ができた頃、メルディアルアが手を止めた。

「こちらがマレナ茶です」

淡い緑色の泡が浮かんだボウルがリサの前に置かれる。
「器うつわを両手で持って飲んでくださいませ。……苦みがあるので、無理はしないで
すからね」

「では、いただきます」

リサは言われた通りボウルを両手で持つと、縁にそっと口をつけて一口飲む。

——やっぱり！ これは抹茶だ！

ほろ苦さとともに抹茶の香りが広がる。柔らかな泡立てられたそのお茶は、とろりと舌を滑なって喉のどに落ちていく。

懐かしい味わいに、リサはうっとり息を吐いた。

「どうでしょう？ お口に合いましたか？」

メルディアルアは心配そうにリサの反応を窺うかがっている。リサはボウルに落としていた視線を上げると、勢い込んで言った。

「抹茶——じゃなかったマレナ茶、とてもいいと思います！ というか私がお菓子に使わせてもらいたいです！」

「お、お菓子にですか？」

テンション高く話し出したリサに、メルディアルアは目を瞬またたかせる。ここまでリサが

食いつくとは予想していなかったようだ。

「マレナ茶はお菓子に練り込んだり、振りかけたり、いろいろと使えますよ！ マレナ茶味のクッキーなんて、すごくおいしいと思います！」

「マレナ茶のクッキーですか！ それは食べてみたいです！」

クッキーが好きなメルディアルアは、期待に目を輝かせた。

この世界でお茶といえば、花茶はなぢやだ。フェリフォミアの名産でもある花茶は、その名の通りお茶の葉ではなく、花やハーブで作られている。リサが元の世界で慣れ親しんだ緑茶や紅茶は、これまで見たことがなかった。

「ちなみに、エンゲルドでは他の飲み方はしないんですか？」

「他の飲み方、ですか？」

きよとんとして首を傾かたげるメルディアルア。それを見るに、マレナ茶はお湯に溶かして飲むことしかしていないらしい。

「では、お砂糖と温めたミルクを用意していただくことはできますか？」

「ええ……すぐに用意させますわ」

メルディアルアは戸惑いつつも、侍女たちに指示を出した。

「それにしても、リサ様があっさり飲んでしまわれたのに驚きました。マレナ茶は独特